



あのときの常呂・写真館

VOL 159

(1994年)

平成6年6月1日

元宮城県子牛田農林学校生徒が日吉地区を 52年を経て再訪

▶今回は、第2次世界大戦中のできごとが現代につながったエピソードです。昭和18年6月に、宮城県から援農のために常呂村の日吉地区に入った農林学校の生徒たちが、52年の時を経て日吉地区を訪れ、当時受け入れした地域の人たちと旧交を温めました。当時の状況や交流のようすは、添付した「広報ところ」7月号に詳しく載っています。

●「日吉小学校沿革史」には、このことを次のように記録しています。「昭和18年6月24日、宮城県子牛田農林学校生徒37名、山崎教諭引率、援農部隊として入地受入式挙行、各家庭に分宿す。7月26日、無事終えて帰還す」。また、「常呂村当直日誌」には帰還のことを「午後3時8分発の列車にて退村」と記しています。



*上：日吉支所までの出迎え（郵便局と今井商店が見えます）



*左・下

当時、生徒を受け入れた地域の
人たちとの交流



*下：役場前での記念写真



●日吉地区には、8月にも静岡県からも同様な援農があり、「日吉小学校」沿革史」には「8月10日、6時30分、静岡県中泉農学校（現在の磐田農業高等学校）勤労報国隊35名、鈴木裕哉教諭引率、入地受入式挙行、それぞれ各家庭に分宿さる。9月8日午前8時半より本校（日吉小）において中泉援農隊解散式挙行、柳田技師、原村長、その他役場吏員、部落有志、受入者父兄多数列席盛会、11時半バスにて出発」と記載されています。●日吉地区への援農は、この年の2件だけですが、「常呂村当直日誌」には、翌19年8月5日から10日までの短期援農があったことが記載されています（どこから来たのか、どの地域に入ったのかは不明）。

●戦時中の子どもたちがどのようなことをしていたのかは、「常呂小学校学事報告」で垣間見ることができます。●平成18年の重要行事として、鯉漁業手伝い、夏季集団訓練として援農や虎杖（いたどり）葉採集などの記載がありますが、具体的な活動には触れていません。翌19年には、主要行事に〈勤労〉の項目があり、「鯉漁援助 5月10-15日、5日間、延べ262名 高等科は箱打ち、初等科6年は運搬、火急人不足を補う 漁業会より報償金300円、児童より寄付申し出あり、運動具備品に使用すべく考慮中」、「苗圃作業 5月2日第1回補植、後時折継続して除草、植え付け等秋にいたるまで数回、初回以上にて実施」「虎杖葉採集 8月いっぱい連日炎天下に刈り倒し収集、荷造り、発送まで全児童出勤、戦果7貫詰55俵、計385貫」、「援農 春以来自家農事には務めを働くよう奨励、10月上旬より11月中旬にかけて馬鈴薯掘りを主として東浜・土佐等に出勤、延べ人員380、戦果185円77銭、各児貯蓄す」、「除雪 20年2月中旬3日間にわたり高等科出勤、自動車道路除雪、延べ人員170名、報酬510円、各児貯蓄す」、「軍への援助 10月7日、壕掘り、高等科男子」と児童によるかなり多数の労働が記されています。●昭和20年に入ると新学期早々から〈勤労〉が始まります。「国力鉱山除雪、4月、高等科」、「海扇（ホタテ）養殖 4月10日-6月頃まで出勤日数15日、高等科・初等科6年」、「日通台車積み 4月18日-5月、11日間、高等科」、「鯉、5月3日間、高等科」、「干馬鈴薯（アルコール原料）製造、5月22日-7月、3日間」、「防火貯水槽、5月22日-11月20日、10日間」、「防空壕 7月中20日間」、「針葉油採取、第1回 6月17日-7月6日高等科、第2回 8月8日-8月16日高等科」、「鉄鉱積み卸し、8月中3週間」、「鉄道除草3日間」、「営林区署援助3日間」、「粉化食原料、櫛（ナラ）葉・海藻・虎杖（いたどり）葉採集、終戦後8月、9月中15日間」、「馬鈴薯掘り、10月4日-10月31日約15日間、高等科・初等科6年」と終戦後まで高等科を中心に児童・生徒の労働が続きました。

●戦時中の農業に関する写真は数少なく、青年団が動員された写真を2枚紹介します

*下：昭和19年11月8-12日
福山青年団の総突撃運動土地
改良排水溝掘り作業



*上：昭和18年頃の下川沿（共立）
男女青年団による献納えん麦
収穫作業

古びた写真携えて

52年振りの思い出の地へ

第二次世界大戦の戦況が悪化していた時代に、学徒勤労奉仕隊（援農隊とも言う）という制度がありました。食料増産のため、出兵で働き手がない地方を支援するのを目的として作られたもので、当時の常呂村にも、全国各地から七回にわたって派遣されてきていました。

昭和十八年当時、常呂村に学徒勤労奉仕隊で派遣されていた子牛田農林学校（現在の子牛田農林高校）の一行十六名の人たちが六月一日、思い出の土地、日吉を訪れました。



（写真提供 岩下 きよみさん）



子牛田農林七十年史には「昭和十六年になると、卒業生の修学旅行も東京までの三日間になり、次の年にはそれさえもなくなり、昭和十八年にはかわって勤労奉仕が登場した」と書かれてある。

昭和十八年六月から常呂村に入つた子牛田農林の生徒は三十七人。

当時勤労奉仕隊を受け入れたのは日吉、吉野、登、福山地区の出兵のため働き手のいない農家でした。

岩下一男さん宅に当時泊まった二人は、日吉の岩下さん宅を訪れ、応対に出た岩下きよみさん（当時二十三歳）の顔を見るなり、面影があると感激した様子。最初は何が何だか



分からなかったきよみさんも、当時の写真を見せられ、記憶を取り戻して、当時の話に花が咲いていました。当時を良く知る小倉さん宅では、当時の人の行方を必死になって訊ねたり、遠藤さん宅（元の小貫さん宅）では、当時のポプラ並木があった場所を確認する姿が印象的でした。また、当時登、吉野地区に入つた人たちは離農跡地に佇み、必死に記憶を辿ろうとしました。

この勤労奉仕の目的は、食料増産のため、男手の足りない地方への援農隊という事ですが、次代の技術者に、開拓地に対する眼を開かせるという国策的なものでもあったようです。一行十六名は、この後、常呂町役場を表敬訪問し、新たな思い出を胸に常呂町を後にしました。